

李盛煥・木村健二・宮本正明編著

## 『近代朝鮮の境界を越えた人びと』

日本経済評論社 2019年 vi + 259ページ

い どん ほん  
李 東 勳

本書は主に近代期の東アジアにおける日本人と朝鮮人の移動について、境界を越えた個人や団体の活動を中心に考察したものである。日本と朝鮮半島の間における人びとの移動のみならず、中国の東北部や南洋群島地域もとりあげられており、研究対象は広範囲に及んでいる。植民、移民、引揚げ、「強制送還」、「密入国」という複雑な移動形態が論じられており、在日朝鮮人、在朝日本人、在満朝鮮人など多様な群像が登場する。

近年、日本帝国の形成や崩壊によって生じた人口移動を総合的な観点から論じた研究書が数多く刊行されている。それらの著作は「内地」、「外地」、そして日本帝国の勢力圏との間における人びとの移動は一方的なものではなく、双方向的なものであったこと、また各地域に形成された日本人社会の政治行動が活発であったことなどを論じている。これらの研究は、概して政治・地理的、社会・文化的観点からの越境論であったが、本書は境界を越えた人びとに焦点を当て、さらにミクロな観点からの越境論を展開している。本書はまた、越境を経験した個人のライフストーリーや、団体の活動を取りあげ、近代期の東アジアにおける「境界」と「越境」の意味を問い直そうと試みている。以下では、本書の構成順に従い、その内容を紹介する。

第1章の尹裕淑論文は、近世期の豊臣秀吉の朝鮮侵略と捕虜連行の結果、おもに西日本に形成された朝鮮人集団居住地の様相を考察している。論文では「被虜人」が残した記録や公文書の記録をもとに、長崎・福岡・佐賀・愛媛・高知県の事例が紹介されている。連行された朝鮮人捕虜がどのような集団を形成していたのか、藩からどのような待遇を受け、どのような生活をしていただのか考察を行う。断片的ではあるものの、藩の事情によって地域ごとに異なる

実態があったことがうかがわれる。

第2章の金明洙論文は、大韓帝国期に渡韓した日本人の活動をとおして、日本人技術者が韓国の近代化に果たした役割を論じたものである。本章では日本からの技術導入や技術者の雇い入れが韓国の植民地化にどのような影響を与えたのかについて、「技術の政治性」という観点から考察が行われている。技術者であり実業家でもあった井上宜文という人物が紹介されているが、渡韓初期の活動歴から、井上は日露戦争時に従軍し、日本軍の戦争遂行に協力した人物であることがわかる。また井上は韓国の度量衡法を日本に合わせたことで、対韓経済侵略を容易にする過程に一定の影響を及ぼした人物でもあった。植民地化後に実業家として活動した井上の経歴からは、在朝日本人の多様な生き様が確認できる。

第3章の柳沢遊論文は、おもに1910～1920年代における在朝日本人の「満洲」地域への移動を考察したものである。日露戦争時の経験は日本人の大陸進出を促し、朝鮮を経由した満洲移住の重要な契機となったことはよく知られている。これを踏まえ、柳沢はこの時代の植民地朝鮮と「満洲」地域の関係を論じる際のキーワードとして「鮮満一体化」政策を提示する。この「鮮満一体化」政策自体は1920年代半ばに破綻するが、この政策がきっかけとなり、人びとの移動を促した過程を朝鮮・満洲紳士録などの資料を基に論証している。民間人、官僚経験者、警察巡査・憲兵としての朝鮮居住者、朝鮮銀行・東洋拓殖会社社員、朝鮮鉄道員の満洲進出の事例をとおして、新たな市場として、また新たな労働の場として満洲を見出したさまざまな在朝日本人の存在が確認できる。

第4章の李盛煥論文は、19世紀半ばから「間島」地域に形成された朝鮮人社会を取りあげ、農業経営を中心に間島朝鮮人社会の特質を考察している。領土問題や独立運動に集中していた先行研究に比し、本章は間島における農業経営状態と朝鮮人社会を取り巻く政治状況を中心に論じている。漢民族が数的大マジョリティーではない特異な地域であった「間島」では、「間島協約」の締結後も、依然として朝鮮人人口が多数を占めていた。以降、中国人中心の土地所有権の確立、中国人地主と朝鮮人小作人における民族の葛藤が浮き彫りになる。そして、韓国の植民地化後にはそれがさらに複雑さを増すこととなり、間島は国民、領土、主権が分離する現象をみせてい

た。李はこうした状況を「解体された国家」という枠組みから論じている。

第5章の今泉裕美子論文は、朝鮮人の南洋群島への農業移民を考察したものである。本章では1939年に南洋群島パラオ諸島バベルダオブ島に南洋拓殖株式会社の子会社として設立された豊南産業株式会社がとりあげられている。同年実施された第1回の朝鮮人の農業移民について、会社側と朝鮮総督府や南洋庁との間で行われた交渉内容を分析し、朝鮮人移住者の募集のあり方をその以前の時期と比較・検討している。この作業を通して、南洋群島への農業移民は日本帝国の勢力圏を熱帯に拡大させることが目的であり、その新たな担い手である朝鮮人農民に、島を開拓させ、そこに永住させようとするものであったことが論じられる。第2回移民では、以前に比し朝鮮人農民への待遇が悪化したことなどが明らかにされている。

第6章の木村健二論文は、在朝日本人鉄道従事員の戦前と戦後におけるライフヒストリーを考察したものである。山口県文書館に寄贈された個人記録を利用して、戦時下に朝鮮半島に渡航した日本人が日本に引揚げ、鉄道業界に再就職する過程を考察している。朝鮮への就職過程、職場の賃金水準など具体的な内容からは、「内地」とは異なり、より有利な条件で就職できた状況などが確認される。戦後の引揚げと再就職をめぐるのは、朝鮮総督府出身者の相互扶助のもとで可能となった同一業界への再就職ルートについて考察を行う。

第7章の宮本正明論文は、在日朝鮮人団体である協和会の末端組織を対象に、戦時期における言動と敗戦直後の意識を分析したものである。まず、戦時期において協和会が整備される過程、協和会の構成、関係者の政治的位置や役割を分析する。また、協和会の末端組織である補導員・指導員の社会的位置づけなどを検討する。戦時期における彼らの言動を通じては、それ以前からの日本への定着のための努力や積極的な戦争協力などと結びつく形で、「日本人」になりきる意識が培われる様相がうかがわれる。なお戦後における協和会関係者の意識の分析からは、日本での残留希望が「永住」を意味するものであったこと、さらに、敗戦を迎えても祖国との断絶を辞

さない、ある意味では朝鮮人としての民族性を改めて問い直すものであったことが明らかにされている。このように「日本人」になりきろうとした朝鮮人の前に新たな壁として現れたのは、戦後に顕在化した日本人との「境界」意識であった。

第8章の崔範洵論文は、在朝日本人二世の小林勝の小説をとおして、戦後における「送還」と「帰還」問題を論じたものである。戦前における移動・移住に対する日本人の意識を知ることができる文学テキストとして、小林の「ある朝鮮人の話」(1952年)と「赤い壁の彼方」(1958年)が紹介されている。前者のテキストからは、朝鮮戦争期に行われた朝鮮人に対する強制送還について、戦後の日本政府がどのように彼らを処遇したのかが考察されている。また、大村収容所という空間の歴史的な性格が検討されている。後者は植民者二世の帰還と彼らの心理的深淵を描いたものである。小説テキストにみられる二世少年の「慟哭」は、引揚げ当時の心理状態ではなく、1950年代後半の日本において小林自身が感じた絶望でもある。戦後、小林の文学を含む「引揚げ文学」は日本社会の無関心の中に放置されていたが、これは戦前の日本人の越境に対する戦後日本の無関心や無智と通底していたと、崔範洵は論じている。

以上、本書の内容をまとめてみると、研究範囲が広範囲に及んでいることが改めて確認できよう。意欲的な構成ではあるものの、本書の議論がまとまりをみせず、放射状に展開する要因にもなっている。また、本書のキーワードである「境界」、「越境」の概念が書き手によって微妙に異なることがうかがわれる。植民、移民、引揚げ、「強制送還」、「密入国」という人びとの移動は、主体（在日朝鮮人、在朝日本人、在満朝鮮人など）によってそれぞれ異なる意味をもっているからである。そのためか、本書は近代期の日本帝国の植民地や勢力圏内における人びとの「越境」への議論を目指しているものの、問題意識や議論の軸にばらつきがあることは否めない。とはいえ、本書がこの時代にあった双方向の人びとの移動を論じる際に参考すべき1冊であることに間違いはないであろう。

(韓国 啓明大学国際学研究所研究員)